

はしがき

二〇一三年、「一帯一路」構想が習近平により打ち出されてから一〇年以上が経った。この間、中国経済は様々な不確実性を抱えながら成長を続けてきた。そして、中国社会は様々な難題を抱えながらも、確実に以前より豊かになった。政権発足当初は弱い指導者だと思われていた習近平は、権力と権威を自らに集中させ、一強体制の長期政権を実現した。もちろん、習近平政権にも問題がないわけではなく、特に、不動産「バブル」崩壊（二〇一九年頃から始まったとされる）に端を発する経済不況により、いよいよ「中国の台頭」の終焉が始まったとも言われた。しかし、中国の国際的役割がすぐに大きく低下すると考えるのは短絡的であろう。

改革開放以降の中国は、経済発展という実利を重んじ、「韜光養晦」^{とうこうようかい}の方針の下で、アメリカをはじめとする西側諸国が主導する国際秩序に適応してきた。しかし、「一帯一路」の提唱とはほぼ同じ時期から、中国国内では「韜光養晦」への見直しに関する議論が活発化していった。その後の中国は決して西側諸国主導の世界秩序と決別しようとはしていないが、「中国の夢」や「中華民族の偉大なる復興」といったスローガンを掲げながら、着実に自己主張を強めてきた。強い指導者である習近平肝煎りの「一帯一路」構想は、二〇一七年に中国共産党規約にも挿入され、後戻りができない、失敗が許されないものになった。

習近平政権と中国社会の自信が増大するなか、「一帯一路」構想の規模や活動内容も拡大し、世界の注目を集めてきた。中国が主導する世界秩序はどのようなものなのか、中国主導の世界秩序は西側諸国主導の国際秩序はどのような異なるのか、中国はいずれアメリカをはじめとする西側諸国と衝突するのではないか、あるいは中国の試みはいつ失敗するだろうかといった根本的な問いに対して、多くの人々は「一帯一路」構想の中にその答えを探し求めている。

しかし、万華鏡のような「一带一路」構想ははたして満足できる答えを提供してくれるだろうか。むしろ万華鏡のように、覗き込む人が最も見たい景色がそこに映し出されるのではないだろうか。浅野が序章で論じるように、「一带一路」には虚実が入り混じっており、部分的な真実を積み重ねても、虚偽や錯誤の鏡でできた迷路に入り込むことになりかねない。

本書各章が説明しているように、「一带一路」構想を構成する各分野の政策や活動は、「一带一路」という名称が打ち出される以前から既に存在していた。習近平政権は「一带一路」という当初曖昧だったコンセプトを打ち出した後、強大化する中国の政治力、経済力、軍事力、技術力や文化的な影響力を動員し、曖昧なコンセプトを壮大で野心的な構想にまとめ上げた。このプロセスの中で、中国政府の宣伝と、国内外の有識者、実務家による多種多様な解釈が加えられ、虚実入り混じる万華鏡がわれわれの目の前に現れたのである。

中国政府の宣伝や個別具体的なプロジェクトを見れば、「一带一路」はユーラシア大陸という世界島の東西を繋げただけでなく、その周辺の海とさらに外縁に当たる大陸にも影響を及ぼしているように見える。この繋がりは鉄道のような伝統的なインフラ設備だけでなく、デジタル空間や人々の交流にも浸透している。しかし、中国が「一带一路」という「戦略」を実現することで、かつての地政学者が言うように世界島を支配し、世界を支配することになるかという点、本書の分析から分かるようにそれは現実味に乏しい。アメリカと日本は既に「自由で開かれたインド太平洋」構想を軸に長期戦の構えで対中政策を調整しており、ヨーロッパ諸国も「グローバル・ゲートウェイ」構想を打ち出すことで対中デリスキング（リスクヘッジ）をしようとしている。そして、東南アジア諸国が代表するように、多くの中小国は「一带一路」構想に参画しつつ、西側諸国との連携を強化することで対中関係のバランスを維持しようとしている。そもそも中国の国力も無限ではない。中国が抱える国内政治、経済、社会の諸問題は、いずれ「一带一路」構想だけでなく中国の台頭そのものを減速させることにもなりかねない。

では、「一带一路」構想はいつの日か江沢民時代の「西部大開発」、胡锦涛時代の「和諧社会」と同じように国際政治学のテキストの一行となり、静かに人々の記憶の彼方へと消えていくだろうか。それとも、将来に樹立されるかも

しない、中国主導の新たな国際秩序を象徴する言葉となるのであろうか。秩序をめぐる競争を背景に、平和と安定を維持することがいかに困難なことについては、歴史が既にわれわれに多くの知識を与えてくれた。未来を理解するためには、歴史から学び、現在の複雑な問題と向き合う必要がある。本書の議論が、過去・現在・未来を見通した読者の皆さんにとって少しでも役に立つのであれば望外の喜びである。

二〇二四年一月

執筆者を代表して

浅野 亮
張 雪 斌